

議会改革特別委員会

(平成30年 8 月 1 日)

○ 豊田政典委員長

それでは、議会改革特別委員会を開催いたします。

今回、4回目になりますが、大変タイトな委員会スケジュールをお願いしている中で、各会派、団体では間を縫っていただいて、委員会の報告、それから、会派、団体での議論を行っていただいていると聞いておりますことに感謝をいたしたいと思います。

まず、少しだけ話をさせていただきたいなと思うんですが、ちょうど8年前の今ごろ、議会基本条例を作成する特別委員会をこの議会では続けていました。そのときに、8年前、改選を前に、これからの議会の理想形、どういう議会にしていこうかという話し合いを熱心にされていたと思います。その後、今年度で8年目になりますけれども、議会基本条例の理想を掲げながらも、議会改革についての会議体というのはこれが8年ぶり、議論をしているわけです。ただ、3本柱であります市民との情報共有、市民参加の推進、議員間討議と政策提案ということ掲げてやってきたけれども、果たして四日市市議会、この8年間、どれだけ理想形に近づいたかというのは疑問もあると、どう具体的に実現していくかどうか。

例えば市民との情報共有、市民参加の推進ということで、昨年度、四日市市議会でも市民アンケートをとっていただいて、市民意見を反映されていると思いますかという問いに対して、いないというのが過半数、57%ありました。議会の様子がわかりやすく伝わっているか、市民との情報共有、これについても多くがわかりにくいという答えであった。

それから、昨年度、私、議長でしたが、加納議員や諸岡議員、その他の方と視察対応をさせていただいた。30回近く対応させていただく中で、議会改革の先進市議会を楽しみに来ましたと皆さん言うんですね。その中で、議員間討議、四日市市議会は先進議会はどうやってやっているんですかという質問とか、通年議会を検討しているけれども、どんなメリットがありますか、どういうふうになりましたか、こんな質問がよく出ましたが、私はそのときに大変困った記憶があります。議員間討議、確かに四日市市議会ですらやろうとしているけれども、まだまだそれは進んでいないんじゃないかという思いが強かったので、余り期待外れの答えもできない中で、成果としてもなかなか説明できない。通年議会にしてもそうです。通年になって何が変わりましたか、どんな効果がと言われても余りぴんと来ないというか、まだまだ通年議会のメリットを生かし切れていない、途上かな、これか

ら検討しているところすみたいな答えしかできなかつたという思いが、思いというか、そんな苦い思い出があります。

そんな中で、ほかの視察に来た議会とか、あるいはほかのさまざまな議会の中で、今の議員間討議をいかに活性化させるかというのが一つの大きな流れ、テーマ、議会改革をしようと思っている議会にとっては、これは一つのテーマです。もう一つが、議会のサイクルを確立している議会というのはどんどんふえてきています。これを四日市市議会はきちっとしたものができていないので、何とかサイクルというのをつくって、また、議員間討議を活性化して、意見集約していく。これを市長にぶつける。こんな仕組みができないかなということで、この特別委員会の設置を私は提案した経緯があります。

それから、もう一つは、大切な市民の意見、市民とともに議会をつくっていく、まさに市民代表の議会にいかによればなれるか、これについても、四日市市議会、いろんな取り組みがあるけれども、まだまだ不十分かなという思いが私にはあります。

そんなことから、この特別委員会が皆さんの同意をいただいて発足して、この各委員の皆さんが集まってきている。改選も近づいておりますけれども、何とか改選後には新しい仕組み、体制の中で、より四日市市議会が議会改革の旗手として力をつけていく議会になるためにどうすればいいか、そのことをこの委員会では話し合いたいなということを改めて皆さんも頭に置いていただいて、今後の議論をぜひお願いしたいと思うし、各会派で、なかなか説明は難しいと思いますけれども、どうか力を尽くしていただいて、また、不十分というか、補足的には正副委員長に要請があればどこの会派でも行きますので、よろしくお願いしたいなということをしやべらせていただきました。

そんなことで、じゃ、ライトを消していただいて、きょうの1項目めなんですけど、きょうは4回目ということで、8月の4回目、④です。今、議会の政策サイクルと任期の見直しというのをやっております、4回目なので、そろそろ集約の方向に向かっていけば大変ありがたいなと。あと、議会日程の合理化とか、ほかにも少しありますので、あと、4、5、6回とお願いしてはいますが、このスケジュールをもう一度頭に置いていただいて、よろしく願いをいたします。

それでは、前回の概要をもう一度おさらいということで、事務局のほうから前回のまとめのポイントを説明していただきたいなと思います。

○ 栗田議会事務局主事

事務局でございます。

それでは、概要のほうの説明をさせていただきますので、お手元のタブレットのほうで、14特別委員会、03議会改革特別委員会、その中の03の平成30年7月20日のところをクリックいただきまして、一番下段にある議会改革特別委員会概要という資料をお開きいただきたいというふうに思います。

それでは、ご説明のほうをさせていただきます。

前回、7月20日の特別委員会でございますけれども、前々回に当たります7月10日の議論の概要をまず冒頭にご説明させていただいた後、7月10日の確認事項に基づいて議論のほうが行われましたので、それに基づいて出された意見というのを1の議会の政策サイクルについてというところから下に整理してございますので、順にご説明のほうをさせていただければというふうに思っております。

まず、委員から出された意見等ということで、決算審査と予算審査を連動させるサイクルの部分で、サイクルの構築の必要性についてというふうな項目でございますけれども、こちらのほう、委員のほうから出された意見としましては、議会としてそういうシステムがないというのは理解できますけれども、そういうふうなシステムを確立せずとも、各個人単位では、そういう次期の予算への反映を意識した決算審査が実施されているのではないかなというふうなご意見だとか、あとは、会派で協議した結果、もう正副委員長案のとおりでいいですよというふうなご意見等が出されたというふうな形でございます。

それから、次の項目の執行部への提言手法についてという部分でございますが、こちらは提言シートということで、正副委員長案が告示しをされまして、こちらについて議論のほうを行っていただきましたけれども、最終的には、提言シートを一度会派にお持ち帰りいただいてご協議をされたいということでご意見のほうがあったというふうなことでございます。

それから、執行状況の検証についてという項目でございますけれども、こちらにつきましては、前年度の決算審査を次年度の予算審査に活用するということであると、どうしても現年度の予算を扱うタイミングがないということございまして、何とか現年度の執行状況を踏まえて、即次年度予算に反映していけるような、そういうふうなシステムというのも構築を検討すべきではないかと、こういう意見が出されまして、次ページでございますが、正副委員長様のほうから一度執行部における予算編成の中身については確認を行わせていただきたいと、こういうふうなご説明があったというふうな形でございます。

続きまして、課題設定を行い共通のテーマで議論を深め、政策提言等を目指すサイクルの部分でございますけれども、こちらにつきましては、冒頭で正副委員長様から、前回、7月10日の特別委員会での議論を踏まえまして、2年間で一つのテーマと固定するのではなくて、テーマの大小に応じて2年間の中で柔軟にテーマ設定を行えるよう変更すべきと考えているというふうな形で修正案のほうで冒頭お示しされまして、それに対して出された意見というのは記載のとおりでございますけれども、最終的には、一番下の黒ダイヤにも示していただいております、一度会派にお持ち帰りいただいて、その修正案について議論をしていくというふうな形でおまとめいただいておりますかというふうに思っております。

それから、任期についてということでございまして、こちら、4常任委員、それから、正副委員長、それから、ページをめくっていただくと、正副議長というふうなことで、項目をおまとめさせていただいておりますけれども、出された意見は、もうこちらに記載のとおりでございます、主に継続性というふうな意味から2年間がいいんじゃないかというご意見もあれば、もう既存のとおり、現状のとおり1年で実施するのもいいんじゃないかというふうな、さまざまな意見が出されたというところでございます。

それを踏まえまして、最後のページの中段あたりに記載のほうでございます4常任委員、正副委員長、正副議長というふうな括弧書きがしてある項目でございますけれども、委員のほうから、任期を2年化するメリット、デメリットを一覧表にまとめまして、比較して判断をしていくべきじゃないかという意見が出された、そのような形でございます、最終的に確認事項としてご確認いただいたのが、読み上げますと、本日出された意見を踏まえ、政策サイクルの修正案を次回までに提示することとし、執行部への提言手法（提言シート）を含め、各会派等で議論を行っていただくこととした。また、任期については2年または1年のメリット、デメリットを一覧表にまとめ、次回の会議において提示することとし、それをもとに議論を行っていくこととしたと、このような確認事項として取りまとめられてございます。

雑駁ではございますが、前回の概要の説明は以上でございます。

○ 豊田政典委員長

前回の議論を思い出していただいたかと思っておりますので、きょうは前回と同じように2ラウンドぐらい、1時間、1時間で休憩を挟んで午後4時ぐらいまでを予定しておりますの

で、よろしく申し上げます。

まずは、最後のまとめにあったように、修正案等の資料を3本ばかり説明をさせていただいた後に、また、前回みたいに、項目というか、ポイントを絞って各会派で議論いただいた意見を伺っていく、そんな流れにしたいと思いますが、よろしいでしょうかね。

じゃ、前の資料を見ていただきたいんですけども、まず一つ目のサイクル、これについて前回意見をいただいて修正したところは、こういう流れは同じなんですけど、ここまでやったんです。ここまでだったんですけども、この矢印の部分に書いてあるように、次の年の8月の決算審査において活用したらどうか、こういう意見をいただきましたから、こうすることによって、くるくる回るんじゃないかなと、そういう修正をしました。

これに関連して、もう一個の資料を表示できますか。これを、ちょっと覚えておいていただいて、これを4年にすると、これも単純なところなんですけど、さっきのやつを4年で流れをつくったときに、ここの部分、お手元にあると思いますが、これを活用していく、こういうふうなところを修正させていただいた。ただ、流れ的には、こう決算審査から始まって、予算審査、こういって、各常任委員会で検証して、その次の2年目の決算審査に生かしていく、こういう流れができるんじゃないかなというふうな、こういう4年の流れ、同じものを示したやつです。これが決算審査と予算審査を連動させるサイクル。

それから、さっきの資料へ戻ってください。下のもう一つの二つ目のサイクルのほうの、簡単に言えば常任委員会のサイクルのほうですね。これの変わったところは、ここで修正させていただいたのは、タイトルというか、2年間で一つの共通テーマを各常任委員会でさわっていくというふうになっていましたが、いろいろ議論をいただく中で、2年間だとして、課題設定、現状把握、政策提言の取りまとめ、これを大きなテーマの場合は2年で1本でもいいし、中テーマぐらいだったら2年で2本でもいいし、もっと小さいやつの場合、2年で3本でもいいしと、そういう意味でここを変えたというのと、最初の課題設定のところも、こういう表現じゃなかったんですけど、前回見ていただいたように、総合計画の中の一番大きな基本的政策で大テーマで2年通してもらってもいいし、中テーマ、重点的な施策でいってもいい、ここの部分を変えました。これがこのサイクルの修正部分ですね。

合わせて、これ、配信していないやつですけど、前回いただいた意見の中で、執行部の流れ、レビューからも入れるんじゃないかという話がありましたから、それを、今、手元には配らせていただきますが、これは執行部のこっちを見ていただくとわかるように、4

月にスプリングレビューをやって、これは予算編成の流れですが、それから、ちょっと細かいですけど、推進計画事業等の重要施策を7月から8月、ことしで言えば、サマーレビューをやっている。ここでは、スプリングレビューを受ける形で、さらに推進計画にどこまで盛り込んでいくんだということを執行部はやっている。それで、予算編成が10月の頭ぐらいですけれども、その間に、予算要求ですね、各部局のね。これを8月からやって、予算編成に向かっていく。それで、予算要求、また調整とかいろいろ執行部側でやって、確定するのが1月から2月にかけてという、こういうことになって、議会には2月から3月に上程をされてきますよね。その間に議会のほうでは、これは現状ですね、現状、決算速報というのは7月から8月にかけて出されて、決算審査を9月ごろにやる。それで、予算審査を行っている、こういう流れ。これは参考程度に見ておいていただいて、こういうのを見ながらこのサイクルを考える材料にしてもらおうかなと思って、つくっていただきました。

資料はそういうことなんですけれども、今から政策サイクルについてもう一度改めて皆さんの意見をお聞かせいただいで、固めていければうれしいなと私は思っているところであります。

済みません、もう一個、見てください。これは二つ目のサイクル、常任委員会のほうのやつをちょっとわかりやすくつくってもらいました。わかりやすいんですけど、細かいので手元の資料を見ていただいて、この4年間ですけれども、さっき、常任委員会のほうでテーマをどういうテーマにするか、大テーマ、総合計画のでっかいやつ、一番大きいやつ、大きくりのテーマを置いた場合に、ここは、ちょっと無視していただいて、これ、普通の年の流れですけど、課題を設定して、2年間でそれに沿った管内視察や行政視察、所管事務調査をやって、年度の終わりに政策討論会というか、議会全体の中で報告して、ほかの所属委員からも意見をもらおうと。また、さらに2年目に深めていただいて、同じ繰り返しですけど、2年目の最後に政策提言を議会全体に提案して了承を得ていく、こんな流れですね。それから、そのときに、ずらして、たまたま今年度というか、来年度、再来年度がイレギュラーなのでこういう書き方になっていますが、これは来年度のことで、もしこれをやるとしてもできない。なぜかという、総合計画がここで変わってしまうので、平成32年度から。ここはちょっとイレギュラーな形になりますけど、大テーマについては特別委員会の中でさわっているよということとか、ここはちょっとうまくできないけれども、通常のパターンでいくとこれが想定されると。それから、中テーマというのは、もう少し

具体的なテーマを置いた場合には、例えばですけど、1年間のサイクルの中で課題設定して同じようにやっていって、11月の政策討論会、何月というのはちょっと置いておいて、1年で1本ずつやるということが考えられるだろうと。それから、これまでのような個別事業であったり、もう少し小さい政策については、必要に応じて、この2年間の中で自由に各常任委員会が設定してやってもらえばいいんじゃないか。これは参考につくっていただきましたので、ぜひイメージを湧かせるために、また各会派で説明していただくときに使っていただきたいなということで、作成し、説明をしました。

そういう中で、今からもう一回順番に行きますが、ここまでで何か質問とかありますか。今までの説明、質問、わかりにくかったというのは。いいですか。

(なし)

○ 豊田政典委員長

そうしたら、1番目のサイクル、決算審査、予算審査の流れ、このサイクルワンについて前回いろいろ意見をいただいておりますが、改めて皆さんから意見を出していただくありがたいなと思うんですけど、いかがでしょう。

○ 中村久雄委員

さっきの部分の質問もあるんですけど、ですから、さっきの部分を聞いていたら、執行部における予算編成の流れで、前回出ておったような決算審査を受けて、その当年度の予算に反映するのは、今の説明を聞いておったら、予算編成した後なのでね。決算審査を終えて当年度というのはなかなか今までどおり難しい部分があるのかなということを感じたんですけど、この今の出ている資料の政策サイクルでは、この次年2月というのは、これは当年度の2月の予算審査のことですよ。

○ 豊田政典委員長

当年度、翌年度。

○ 中村久雄委員

いや、当年8月の決算審査で提言を盛り込んで、次年の2月の予算審査につて、これは

当年度ですね。

○ 豊田政典委員長

当年度ですね。

○ 中村久雄委員

当年度の2月の予算審査ですね。だから、これはなかなか細かいというか、明らかに、決算が8月に出ますけれども、決算速報や、例えばこの平成31年度のところを見ましたら、平成30年度の終わった部分については、ある程度執行部のほうでもスプリングレビューのほうで反映した中での推進計画事業等の重要施策の中に反映される部分もあるのかなと思うんですけど、だから、我々議会として、決算審査で出た提言をそのままその当年度の2月の予算編成に生かすというのはなかなか難しいのかなと感じるんですけど、その辺はどうなんですかね。

○ 豊田政典委員長

私も、その執行部側の動きを調べてもらってまとめてもらいましたが、どこまでの密度で、それから、どこまでのコンクリートというか、例えば、今言われるのは10月のところですよ、平成31年10月のところ。予算編成作業がこの1月、2月の丸の予算確定までの間、これが編成作業だとは思うんですけど、どれだけ柔軟に議会意見を取り入れられるのかということですよ。これ、誰に説明してもらえばええんかな。

○ 中村久雄委員

予算編成権は市長にありますからね。

○ 豊田政典委員長

予算編成権は市長にありますけど、それを言っちゃうと議会の意味がないんでね。それは置いておいたとしても、どれだけ反映できるかということですよ、タイミング的に。どうなんですかね、わからんですけど。

○ 中川雅晶副委員長

例えば、ピンポイントでダイレクトにという影響というところの部分では、その時期によっては、サイクルの回し方によっては、例えば最初の年ってなかなかリンクしていないという感を持つかもしれないですけど、でも、こういった決算、予算、それから、スプリングレビューやサマーレビューというところのこの執行部の流れも含めて、このサイクルをしていくことによって、当然そうやって議論の深まった決算審査をしていけば、当然スプリングレビューとかサマーレビューにおいても執行部はそのことを念頭に置いて予算編成をしていくということは考えられますし、この議会のサイクルをつくることによって、極めてかかわっていけるのではないかなというふうに思いますし、僕もいろいろ調べたら、じゃ、サマーレビューとか、どういうふうなところをやっているのかなと思うと、例えば柏市なんかは、総合計画に基づいてサマーレビューブックというのを市民にも公表しているんですが、中身を見ると、本市の第3次推進計画と事業一覧表を見ると、細かく予算まで出ていて、本市のほうはるかに予算にかかわっていけるというか、そういう部分は多いので、こういうところへどんだん先ほどの二つ目のサイクルも含めて、総合計画の下の推進計画等にかかわっていくことによって、きわめてスプリングレビューやサマーレビューにもかかわっていけるというか、サイクルの中に取り込んでいけるというところに今回の政策サイクルをつくる意味があるのかなというふうには思います。

○ 豊田政典委員長

今、中村委員からくしくも予算編成権という言葉が出ましたけど、確かに市長に編成権があって、議会がこれを入れろって直接的なことはできないと思うんです。ただ、中川副委員長が言うように、いろんな場面で、あるいは定例的に議会意見をぶつけていくことによって、これは必ず反映されていくとは、サイクルを回していけば、これは出てくるというのも理解してもらえらると思うんです。余り直接的であってはいけないけれども、割り振りまで議会が予算案をつくったらあかんと思うんですけど、提言を繰り返していくことによって、必ず反映はされていくと思うんですけど、加納委員、少し意見をいただけると思うんですけど、前回、レビューでタイムリーに意見を言ったらどうだということ言われましたけど、今の議論とちょっと関係あるのかなと思うので、予算にいかん反映させていくか。確かに1年目、1発目だけは、10月ではちょっと遅いような感もありますよね。それも含めて、どうですかね。

○ 加納康樹委員

なので、今表示されているこの執行部における予算編成の流れの下段の執行部のところを見ていて思ったのが、まず確認ですけど、やっぱり執行部としてはスプリングレビューはいいとして、サマーレビュー、推進計画という、このところに対して、議会が首を突っ込むというのか、その情報をちゃんと議会に出してとかいうことは嫌がっておるということによろしいですか、この表を見る限り。

○ 豊田政典委員長

事務局で答えられれば、後でしゃべってほしいんですけど、正副委員長との打ち合わせの前に事務局と執行部とやり取りをしてもらったんですけど、嫌がっているんじゃないかという話は確かにあったんですよ。嫌がられるというか、未成熟なものを議会に公開するという、公の場に出すというのは、執行部側の意識としては余りよろしく思っていないんじゃないかというやり取りは確かにしています。

もう少し何か補足できることがあったら、しゃべってください。なければいいです。

○ 西口議事課長補佐兼調査法制係長

この図を作成するに当たりまして、レビューを担当しておる政策推進課等々にも確認はさせていただきましたけれども、以前に何か予算常任委員会か決算常任委員会かに一度資料を出したことがあったというような事実は確認をさせていただきましたが、ただ、出すのが嫌かどうかまではなかなか直接的には聞いてはないのでというところはあるんですけど、確かにちょっと事務的には、どういうふうに動いたらいいんだろうなという戸惑いは当然のごとく発生してくるのかなという気はしておりますが、ちょっとお答えになっておるかどうかわかりませんが、そのようなことでございます。

○ 加納康樹委員

なので、思うのは、図的にというのもおかしいですけど、本来的にはサマーレビュー、推進計画の段階で示していただいて、そこでの議論をというのが欲しいなどは思っていますが、何せその時期と決算がかぶるのでタイトだろうなというのは想像できるところなんですけど、理想形としては、やっぱりそのやり取りをしたい、そこで線が引っ張れるようなことをやりたいというのが一つ。

もしくは、それがやれないんだとしても、今、中村委員がおっしゃったような、この提言から点線が下りてくるところが10月になるのではなくて、その点線が下りてくるところがせめて要求調整作業——その点線のところね——の8月なり9月のところに下ろせるようなシステムぐらいは欲しいなというのが感覚的なところなんですけど。その提言というのは、だから決算審査を受けてというものではなくて、議会として、当年度走っている事業を見ながら、決算常任委員会マターじゃなくて、例えば予算常任委員会マターで要求調整作業の中に矢印が突っ込めるような、そんな仕組みもあるとうれしいなというのが思いです。

○ 豊田政典委員長

ありがとうございました。

この時期に、この図ではよくわからないんですけど、どの程度固まっているのかなというのがよくわからないんですよ、私も、執行部側がね。少し説明できますか。

○ 西口議事課長補佐兼調査法制係長

今正面でごらんいただいております図の下の執行部の欄のところを見ていただきたいんですけど、9月末、10月の頭ぐらいで、予算編成というのが書いてあると思うんですが、これは予算の編成方針のことになりまして、次年度予算についてはこういう方針で編成をしていきますというような大枠のものが示されて、それに沿った形で各部局、各所属において予算要求作業というのをするということになります。

一旦各課、各部での入力が終わった後に、財政部局との調整が入りまして、最終的には予算案という形で取りまとまっていくわけなんですけれども、9月末から10月ぐらいに、決算審査のタイミングでは、まさに役所の中の各組織が予算要求の処理を、まず事務処理を進めておるといような、時期的にはそういう作業の時期になりますので、確定をしているとかという状況にはまだない、積み上げの作業をしている最中ぐらいのタイミングだと思っていただければいいかと思います。ただ、その上の矢印がもっと前に倒れれば、予算編成方針のほうへ反映をさせることは可能かも知れませんが、ただ、これも年度ごとによって編成方針が示される時期というのが多少前後はしますので、時期的にフィックスされたものではないので、なかなかちょっと、これは年度ごとに見ていかないと難しい部分は出る可能性はありますが、先ほどの概要的なステップでいえばそういう段階、タイミ

ングになります。

○ 豊田政典委員長

私、少し思い出したことがあるので、前に、これを早めようということになると、決算速報というか、決算にまつわる執行部側の作業を早めなければいけなくなりますよね。監査の決算審査も早まらなければいけない。かなり無理があるのかな。でも、前はこの辺だったと思うんですけど、10月まで、少し早まってきたんですよね、中森委員。かなり厳しいかな、もっと早めよというのは。だから、予算の編成のほうでかつて聞いたことがあるのが、変わっていないと思うんですけど、スプリングレビューでは、これに書いてあるように、非常に重要なところの柱になるような事業について、まず枠取りをすると、これがスプリングレビューだと聞いています。サマーレビューでは、もう少し、これは本当に目玉の部分で、サマーレビューのところでは中項目というか、もう少し下のところの推進計画レベルのやつを予算の中で枠取りをします。それで、予算編成は、先ほどの説明だと、予算編成方針が各部局に示されるもので、各部局の中の予算案については、ここからスタートなので、間に合うといえれば、このレベルなら間に合う。大きなところはもうとってあるけど、残余の部分は間に合うんですけど、恐らく予算編成方針の中に各部局への割り当てとか、何て言うんやったか。

(発言する者あり)

○ 豊田政典委員長

シーリングとか、そういうのももうここに出ちゃうんだよね。そこに手を突っ込もうとすると間に合わないかもしれない。間に合わないですよ。予算の割り振り方までね。微妙なところではあるのかなと、もうそんなタイミングやと思います。

ということで、この予算、決算の流れで、今の部分でも結構ですし、ほかのところでもいいんですけど。

○ 中森慎二委員

問題は、議会がどんな提言をするかという話ですよ。だから、推進計画を変更させるような決算を踏まえての提言をするのなら影響すると思うけど、枝葉の部分の話なら何に

も、この流れとして問題ないんじゃないかと思う。だから、どんな提言を扱おうとするかというところは、骨格にかかわるような話の提言なら当然予算編成方針にかかわる話も多いと思うけど、そこまで踏み込んだものになるかならないのかというのは、やってみなわからへんけど、そういう感じじゃないのかなと僕は思うんですよ。だから、一遍やってみる話でいけば、この流れでやってみるということしかないんじゃないのかなと。

初年度だから大きな提言を掲げて推進計画にもちょっと修正かけるぐらいの話が出てくるんなら、もうちょっと根本的に、それやったらもう出納閉鎖時期だって動かさない限り決算の時期は動かんと思うので、ここまで踏み込んでやらなきゃいけないかというのも、一遍やって検証してみたらしか無理じゃないのかなと、その大きな今の流れを変えようとするのは。だから、今あるフレームの中で我々がどんな提言をやっていけるのかということは、一遍やってみなけりゃわからんんじゃないのかなと思うんですけどね。そのために推進計画あるいは総合計画の審議というものを我々もより深めていくという姿勢は、前段の部分であるんじゃないかなと。その前提で決算の中での若干の軌道修正をかけていくと、そういうふうな形で捉えていくイメージかなと、僕個人的には思うんですけどね。

○ 豊田政典委員長

このサイクル全体が、今言われるように、意見集約して決めたからずっとそれでいくということではなくて、やりながらまだ修正をかけていかないとよりよいものはできないと思いますので、まさに今の意見かなと私は思います。ほかの方はどうでしょう。

○ 土井数馬委員外議員

これまでの決算や予算編成の流れなんかを見ていまして、決算審査、9月、10月に入るわけですがけれども、各部局で大枠の予算編成はもうそこで決まってきたわけなんですけれども、その時点で、この議会で決算審査したのが果たしてほんまに入っていたのかどうかちょっと疑問はあるんですけども、今、中森委員もおっしゃっていましたが、提言にしましても、今回、基本的な政策、総合計画などと、あと、また重点的な施策をベースに設定する、ちょっと大きく分けるような委員長からのご発言もありましたけれども、そうであれば、10月ぐらいの決算を受けての提言で、大きなやはり総合計画とか、基本的な施策については、やはり1年かけてもいいわけでしょう。総合計画が1年物じゃないわけですから。だから、そういう意味では、慌ててそこで提言を出すんじゃないし、意見は

意見として出しておいて、引き続き議会のほうで論議して、また来年度に出していく、再来年度になるのかな、2年サイクルということになりますとね。だから、そうすると、やっとなんと2年のサイクルの意味が出てきたものですから、そういうふうな考え方かなと思います。だから、10月の提言に余り一生懸命、一生懸命というところですけど、思い切ったものを出せるわけがないわけですから、そういうふうな考え方を少し分けるべきかなというふうに、私自身は思いますけど、意見ですけども。

○ 豊田政典委員長

ありがとうございます。

他にどうでしょう。

○ 中村久雄委員

まさにこの決算審査でどういうものが出るかというのが肝というのはよくわかります。

やはり推進計画に乗るような大きな事業というのは、やはり今までの行政の流れがあることですし、我々議会が、議会の意思として出しても、やっぱりまずは1年かけて、もう一年かけてじっくり見ていくべきかと思います。

枝葉のことについては、この2月の当年度中に1回変更できるものは変更できるというもの、今までもあったと思います。

そう考えたら、今の現状でも同じような流れでこの議会は進んでいるというふうにはしか見えないですね。だから、この政策サイクルというのが、まさに今の現状のことと一緒にやないかというふうに思うんですよ。その辺、いかがですか。

○ 豊田政典委員長

会派で説明してもらったら、委員以外の議員から、わかるけど今のおりじゃないかと、簡単に言えば、そんな意見が出たということでしょうか。

○ 中村久雄委員

いやいや、今のはこの話を聞いて私がこの政策サイクルについて思ったことで、会派の意見は……。

○ 豊田政典委員長

また違うの。もっと厳しいの。

○ 中村久雄委員

現状が一番ええやないかと。

○ 豊田政典委員長

もうちょっと過激なんですね。

今の意見について、どうですか。

○ 諸岡 覚委員

今、中村さんがおっしゃったことというのは、正直私もそのようには感じます。一番最初のこの会議の1回目のときにも私言ったんですけれども、みんなで意見を出し合って、それでよその状況を見たときに、四日市市議会は名称と形は違うけれども、よそでやっていることは大体やっているなというのを、みんなで大体認識としては持ったと思うんですよ。今、私たちがこの特別委員会でやろうとしている作業は、今あるものは、言ったらばらばらっとここにビー玉が転がっておるような状況なわけですよ、やっていることが。これを一つにまとめてパッケージングして、これが四日市市議会の形なんだという、きちんとした形にフォームをつくろうという、見える形で。その作業なんだというふうに思うんですよ。だから、今とやっていることは同じじゃないかと言われればそうかもしれないけれども、それを正式にフォームとして決めていこうということなんだから、私はこうやってしていくのでいいんじゃないのかなとは思いますがね。

○ 豊田政典委員長

ちょっと違うかもわかりませんが、言ってええのかな、北勢5市の議長会ってありますやん、あるんですよ。どこやらはサイクルをやっている、サイクルをやっていると言って、まさに常任委員会の視察とか、所管事務調査、1年間、2年間、同じテーマでやっているんだと。すごいなと思うんですけど、ここから先、ちょっと……。

形は見えにくいものになっているけれども、四日市市議会のやっていることというのは、それこそすばらしい議論をしてもらっているし、いろんな意見が委員長報告には載ってい

るんですけど、これは今言われるように、きちっと整理して、我々自身も流れ的なものがスムーズに僕の頭の中が回転していくようにできていないと。これを整理して、つけ加えたり修正できるものがあれば、この際きれいにして、きれいにとというのは変ですね、より活性化するようなやつにして、つくり直そうというのが、この政策サイクルの議論かなと、私もまさにそのように思いますが、ほかの方、決算、予算のサイクルについて。

○ 中川雅晶副委員長

もう今までの議論のとおり、冒頭、委員長もおっしゃったとおり、この議会基本条例を策定するときも、合議体としての議会の強みというか、力を発揮するという意味においても、少しは中間ゴール的に常任委員会の活性化というのを目標にして、議員間討議なりという三つの目標を達成するためには、とりあえずは常任委員会を活性化しなきゃならないなど。そのことによって、合議体としての議会をつくり上げていく、個人だけの力でなくて、合議体としてどれだけ議会が発揮できるかというところをもくろんで、いろいろチャレンジをしたんですけれども、なかなかそういうふうにはなっていないという現状があって、いろいろチャレンジをしてきて、前回も四日市市議会が取り組んできた内容というのを皆さんに見ていただいたりとか、検証していただいたとおり、惜しいところまできているのもありますし、全くかすってない部分もあるのかなというのが認識なんですけれども、行政側から見れば、先ほどもあったように、総合計画を中心にした推進計画というのも経年的に数字を出して示されている中において、じゃ、これが深く議論されて、この推進計画の中身を、もうこれは終わっているんじゃないのというのであれば、いやいや、ここはもっと効果を出すためにはこういうふうにしなきゃいけないんじゃないのという議論をしていくということが予算、決算のサイクルでありますし、下のほうの課題の設定を行ってというこのサイクルをつくり上げることによって、極めてこの推進計画、要は予算の骨格を担っていく推進計画の中に、議会として、合議体の議会としてかかわれる可能性というのが非常に高いのかなと思うと、やっぱり今までどおりでよかったら、今までもこういうような議論ってやったりとかして、こういう推進計画の中に議会として手が入れたはずなのに、ほとんど、指し示されてはいますけど、議会として論理的にちゃんと提言のようなものが常任委員会や予算常任委員会として発信できていたかというところでもなくて、各論だけの発信に終わっているところがなかなか課題の部分があるんじゃないかなと。

そういう意味においては、今回のサイクルを構築することによって、もっと体系的にか

かわれる可能性が高くなるんじゃないかなと思うので、ぜひその辺の部分を、先ほど中森委員がおっしゃったところが私は肝ではないかなと思います。そのことに深く、どれだけ各常任委員会、予算常任委員会、議会としてかかわっていけるか、中身をしっかりと経年的に取り組んでいけるかということになると、やはり1年単位では難しいというところが出てきて、そういう意味においても、2年のサイクルは最低必要じゃないかなというのが今回の正副委員長の提案の肝であるというふうに私は思っています。

○ 豊田政典委員長

そこにかかわるところで、議会基本条例にも書いてあるし、やろうと思えばできるじゃないか、議員間討議。でも、できていません。

提言シートについて、前回、案を示させていただきました。これを決算審査の中で活用してもらえば、提言シートを書くためには議員間討議をせなあかんもんで、一つの道具として使ってみたらどうですかと示させていただきました。これについても会派に持ち帰ってもらっているんですけど、何か意見がある方がみえたら、この際聞かせてほしいなと思うんですけど。決算審査で使おうよということで提案しております。これは個別事業のファミリー音楽コンクールの件ですけれども、こういうものを、簡単な話です。今やっている分科会長報告、これ、資料の中にもあります。政策サイクル関係というやつですね。これ、1、2、3と黄色、水色、緑色になっていますが、次のページ、これはもとの分科会長報告の最後のところ、議員間討議をしてもらった去年の産業生活分科会です。ここの黄色、緑色、青色をこういう文章でやったやつなんですけど、これ、現状の書き方ですよ、典型的な分科会長報告。これをさっきのシートへ戻すと、より簡潔になって、こういうふうになると。だから、今の分科会長報告では、各委員の意見を網羅的に書いていますけど、非常に丁寧といえば丁寧なんですけど、読むのにも時間がかかるけれども、こういうふうに議会全体で大切なこととか、市民が知りたいこと、ほかの所属委員が知りたいのはこれでええんじゃないかと。誰が何を言ったということよりも、ポイントだけでいいんじゃないかと。こういうことにまとめていけば、議員間討議も必要だし、報告を受けるほうにしてもわかりやすいんじゃないかということで提案しましたが、何か意見ってありましたか、会派とか。皆さんの個人的な意見でもいいですが。

○ 諸岡 党委員

ちょっとわからんのですが、私はこの評価カルテには賛成なんだけれども。

○ 豊田政典委員長

カルテと違う。

○ 諸岡 党委員

カルテじゃない。何やったっけ。

○ 豊田政典委員長

提言シート。

○ 諸岡 党委員

この提言シートの目的というのは、今の委員長の言い方だと、委員間討議を活性化させるための手段なんですか、これは。

それが目的であるならば、これは私、経験上感じることなんですけれども、私が委員長をしておった何年目ぐらいやったか覚えがないけど、あのころ、議会の中で議員間討議の活性化というのが物すごく言われた年があって、ことしから各常任委員会で議員間討議を活発にやってくださいみたいなことが当時の議会運営委員会やったのか、議長権限でやったのか、ちょっと覚えがないですけど、何かそうやって言われたことがあって、私も委員長、まだ2年目か3年目ぐらいで初心者でしょう。どうやってしようと思って、手探りで議員間討議を進めたことがあるんですよ。正直、1年目、余りうまく仕切れなかったんだけど、2年目に委員長をしたときに、まあまあ議員間討議できたなと思った年があったんですよ。

だから、それは、委員長の手腕にもより、そして、そのときの委員の構成、そういうことに積極的な委員かどうかという委員の構成にもよると思うんですよ。

だから、逆にこれをつくっても、そのときの委員長にそういうふうに活発な議員間討議をつくらせていく、議論をさせていくだけの能力がなければ、やっぱり提言シートをつくっても、恐らく提言シートにはこの意見も書いておいて、この意見も書いておいてって両論併記で提言シートには書かれるようなことになるんだろうし、多分、委員間討議というのはもっとメンタル的な部分の要素が強いと思う。この提言シートをつくれれば委員間討議

が活発になるというのは、そういうものじゃないんじゃないのかなと思うんですけど、いかがですかね。

○ 豊田政典委員長

目的は何だということ、委員間討議っぽいことを言いましたが、議会基本条例の第27条、議員は、あらゆる会議において、自らの意見、考えを丁寧に述べるとともに、他の意見に対しても真摯に耳を傾け、議員間での討議を尽くさなければならない。第2項、議長、委員長等は、議員間での討議を中心に会議を運営し、その結果を市政に反映させられるよう意見集約に努めるものとする。こうなっているんです。

だから、議員間討議をして、委員会なら委員会の意見を集約するように委員長は努めていかなければいけない、これが目的です。これを実現するためのツール、何が目的かと言えばですが、それは少なくとも私が所属してきた委員会では、ほとんどできていないと僕は思っています、8年間、ほとんど。だから、そのための一つのきっかけであり、ツールであるのが、これをやろうよということになれば、より深まるきっかけになるんじゃないかな。あわせて言えば、昨年度、前回にもありましたが、決算常任委員会で委員間討議を決算審査の中でやりましょうというところまでは決めてもらった。ただ、当時言われていた事業評価カルテについての扱いは、この特別委員会に託すということになっているんです。

そこで、委員間討議をやろうよというのは決まっている。このカルテをどうしようかみたいな議論はあったけど、あのときは5段階評価で評価するとあったけど、そこまではちょっとハードルが高いのでというのが前回示したこれです。そんな流れなんですけど。

○ 加納康樹委員

ちょっと今の諸岡さんと委員長の会話を聞いていて腑に落ちなかったんですけど、この提言シートが提言シートという名前である理由としては、さっきの文だと、執行部における予算編成の流れの決算審査からの提言の、この提言がこの提言シートと違うんですか。私としては、そっちがメインと思っていましたけど。

○ 諸岡 党委員

私もそう思っておった。

○ 豊田政典委員長

それじゃなくて、もとのやつを見てください。これは、今のは議会の提言です。今のは最終形ね。もとのやつというのは、一番最初のサイクルの図。提言シートというのは、ここや。分科会の提言案、これを今みたいな提言シートに名前を変えましたけど、ああいうのをつくってもらって、全体会に上げて、それをみんなが承認したら、ここに出すと。

○ 加納康樹委員

それはこの提言と違うんですか。

○ 豊田政典委員長

最終形はね。

○ 諸岡 覚委員

別のものなんですか。

○ 加納康樹委員

だから、私としては、この提言に至るところの補助的なもので委員間討議があるんだろうなど。あくまで、ですから、政策サイクルというものから入っているのであれば、この提言がありきななので、それを支えるのが委員間討議なんだろうなって。

○ 豊田政典委員長

そうそう。だから、分科会でいえば、ここで委員間討議が行われ、その中で特に議論を呼んだ内容について、カルテでもシートでもいいんですけど、今のやつをつくってもらいと。それを全体会に上げてもらって、ああでもない、こうでもない、また委員間討議をやりますよね。その中で、これはぜひ議会としてやろうぜというやつを、10本あるか20本あるかわかりませんが、ここに提言として最終的に集約されるということです。

○ 加納康樹委員

だから、主張は違うけど、言っていることは大して変わらないような気がしているんで

すけど。

○ 豊田政典委員長

言っていることは一緒ですね。

○ 諸岡 党委員

だから、目的があくまでも提言が目的なわけでしょう。委員間討議が目的なわけじゃないんでしょ。そこなんですよ。だから、私は、この提言シートでも事業評価カルテでも名前はいいいんだけど、私はこれはいいいと思うんですよ、やるべきだと思うんだけど、ただ、その目的を委員間討議だということにしてしまうと、多分失敗するんじゃないかということをお願いなんですよ。目的が達成できないと思うんですよ。

○ 豊田政典委員長

別に反対する気はないんですけど、今でもできるじゃないかという話ですよ、それこそ。

分科会長報告の形であったとしても、提言はできないことはない。だから、目的は何だと言われたら、行きつく先は提言なんやけど、一つの仕掛けとしては議員間討議であり、意見集約ですよ。付随的な目的なのかもしれやんけど、仕掛け的にはね。何でそんな提言シートをつくるんだと言ったら、委員間討議を呼び起こしたい、意見集約に努めてほしいからつくるんです。

○ 中森慎二委員

この提言シートは、各分科会で審査をする中で、一つの課題、事業についてもっと深めて、分科会としては、この提言シートでまとめて、こういう提言をすべきだと。だけど、これを他の分科会の人たちに、決算常任委員会の全体会の場所において理解をしていただいて、議会全体の提言としてつなげていくための、そのためのツールにすぎないと思うんですよ。だから、議員間討議、委員間討議等については、これをまとめていくのに付随して必要になってくるというだけの話で、諸岡さんが言われる形だと僕は思うんですよ。

だから、どっちが先かと言ったら、決算常任委員会の全体会のときの、議会全体の提言として取りまとめていく他の委員の皆さん方の理解度を高める、分科会の当事者は議論し

ているわけで、わかっているわけだから、そういうものではないかと思うんだよね。だから、この提言シートをつくるために、必然的に委員間討議も必要になってくるし、それは委員長のリードによって、深い委員間討議ができる環境を努力してもらおうというものに過ぎないんじゃないかな。

○ 豊田政典委員長

そうです。目的、目的と言うもんであかんのやね。

○ 諸岡 覚委員

もう一つ関連して言うと、逆説的な委員長の能力によって、委員長のテクニック次第で、委員間討議を封殺してシートをつくることも可能だと思うんですよ。全く委員間討議なく、上手に委員会運営をしていけば、委員間討議をせずにこの提言シートをつくっていくことも可能だと思うんですよ、恐らく。委員長にその能力があれば。それはそれで、高度な能力だと思います。

ただ、やっぱりここで余り目的を委員間討議としてしまうと、この提言シートの結果論だけれども、提言シートをつくったけれども、委員間討議は高まらなかったな、失敗やったなということになってしまうので、ちょっと目的からは外したほうがいいんじゃないかなと思います。

○ 豊田政典委員長

目的から外す。

○ 諸岡 覚委員

目的はあくまでも提言すること、知らしめることが目的であって、委員間討議を活性化することを目的に入れてしまうと、後から失敗と言われてしまう可能性がある。

○ 豊田政典委員長

提言シートも外したほうがいい。

○ 諸岡 覚委員

いや、提言シートはあっていい。

○ 太田紀子委員

私、去年の決算常任委員会の際の事業評価カルテをつくるという話が出たときに、そこに話に出ていたときに、議員間討議を活発化させるということを物すごく重要視というか、そういう話の上でカルテをという記憶があるもので、それを活発化した上で作成する。それに対して評価、5段階評価なり、何かの評価をつけるという討議がされていたもので、提言はもちろんなんですけど、提言をする前に討議をというのが頭にあって、そこで心配したのは、討議が深まらなかった場合にカルテの作成はどうするのかみたいな、そういう話も出ていたりというのがちょっと記憶にあったもので、どの内容を、今、諸岡委員が言われたようなことを重視するのか、一体何を重視して提言シートをつくり上げていくのか、基礎というか、骨になるのか、その辺がちょっとよくわからないというか、見えてこないんですけれども。

○ 豊田政典委員長

記憶をたどると、去年の決算常任委員会の副委員長もみえますけど、皆さんにご苦労をかけたのは、議長が提案したんです、カルテをね。決算常任委員会の全体会で、これ、目的は何だと問われたもので、評価なのか議員間討議なのかと聞かれたもので、議員間討議ですと私、答えたんです。去年の議論は確かにそう。カルテをつくるのは何のためだ。これは議員間討議の呼び水にしたいからですということ、それはそれで議論してもらった。今の話は、政策サイクルの中でこれの位置づけはどうだという話ですよ。言われるように、政策サイクルを考える上で、この提言シートの部分に余りにも執着しちゃうと、ちょっと違和感があるので、一つの道具ぐらいに考えておけばいいのかなと思っています、この議論の中で。一つ、付加的にあってもいいんじゃないかと。また、わかりやすくするために、ほかの委員に対してね。だから、ここに余り議員間討議に立ちどまってポイントを置き過ぎると政策サイクルがちょっとぶれてしまうので、去年と言うことが違って来るかもしれませんが、そういうふうに考えてもらったほうがわかりやすいかなと思いました。

○ 諸岡 党委員

委員長のおっしゃる議員間討議というのは、私は重要なものだと思うんですよ。これは

絶対、活性化、活発化させなければいけないと思うんですけど、別にそれは、決算、予算に関する事以外でも、いついかなるときでも議員間討議というのは必要なので、このサイクル云々とは別問題として、議会全体のテーマとして、いついかなるどんなときでも、それは協議会であっても、所管事務調査のときであっても、いつでも議員間討議は活性化、活発化するべきなんだから、議会全体のこのサイクルとは関係のないところでこれを高めていきたいと思いますという、そういうことでいいんじゃないですか、議員間討議については。

○ 豊田政典委員長

ほかの皆さんはどうですか。

○ 中森慎二委員

いいこと言うね。

○ 諸岡 覚委員

ありがとうございます。

○ 中森慎二委員

大項目の一つで取り上げたらいいいんじゃないかなということやね。政策サイクルの中の一つの何かじゃなくて、細かいことじゃなくて、もっと大きな位置づけで上げたらいいいんじゃないですか、それだけを捉えていくということじゃなくて。

○ 中村久雄委員

そうしたら、これは私の理解が間違っておるか、合うておるか。この真ん中の提言、これは決算常任委員会の全体会を経て、議会としての次の予算執行に関する意見を述べる、提言するのが真ん中で、予算編成に向けて、議会はこう考えているよということかな。これは、両論併記とか云々じゃなくて、議会としての意思をまとめる。それで、分科会審査で、今、案で出ている提言シート、この部分は、分科会ではこういうふうな意見があったというので、それをいろいろなことを踏まえた上で分科会ではそういう結論を出すんですかね。両論併記で全体会に送る……。

○ 豊田政典委員長

ごめん、途中ですけど、これはやっぱり、両論併記はないんじゃないかな。

○ 中村久雄委員

各分科会で議員間討議を尽くして、集約していく。それで、その結果、その内容は書きますよね、内容はほかに付随しますから、提言として一つ集約する。これはなかなか難しい作業だと思いますよ、分科会の中では。その上で、全体会でまたそれを示して、議会全体としての今さっきの真ん中の予算編成に向けた提言につなげていくというふうな理解でいいですか。

○ 豊田政典委員長

私はそういうふうだと思いますが。

○ 中村久雄委員

そうしたら、今でいう全体会送りが前提の提言ということになるわけやね。決算常任委員会の全体会で必ずもまなあかん。しっかり分科会で審査した内容も、皆さんに知らしめて、その上でこういう部分を今、一分科会では次の予算に向けて推進計画にかかわることできても、こういう意見で出したいんやということを全体会で諮る。

○ 豊田政典委員長

全体会送りですね、これは完全に。

じゃ、決算常任委員会の全体会で議論してほしいやつを各分科会で出すやつやろう。違いますか。

○ 諸岡 覚委員

だから、結論づけることができたやつは、決算常任委員会の全体会に送らなくてもいいわけですよ。両論併記にとどまらざるを得ないようなものだけが全体会に行くわけですよ。

○ 豊田政典委員長

そんなことはないやろう。

○ 諸岡 党委員

分科会で意見の一致を見ることができなかったから全体会に送るんじゃないんですか。

○ 中村久雄委員

必ず決算常任委員会の全体会で皆さんの意見を集約しておかな、議会としての意思をこの真ん中で次の予算に出すのはちょっと失礼かなとか、ちょっと乱暴かなとか。これは、議会としての意思を確認せなあかんので、これは必ず決算常任委員会の全体会でもんで、なるほど、これはもう来年とか、これは考えてもらわなあかんという部分で出さなあかんのかなというふうに理解しておるんですけど。

○ 豊田政典委員長

諸岡委員の言われたのは、分科会で全会一致でまとまったら、集約できたやつは、そのままもうスルーでここに、例えば都市・環境分科会からの提言はここに行くと、自動的に。

○ 諸岡 党委員

行くんじゃないのかなと。

○ 豊田政典委員長

中村委員や僕が言っているのはそうじゃなくて、必ず報告をして、全体の意思として決定という手続を踏まないと、こっちに入れてはいけないんじゃないかという話ですよ。

○ 諸岡 党委員

私が言いたかったニュアンスはそういうことではなくて、決算常任委員会の全体会に形としては全部上げる。ただ、その全体会で取り上げるのは、分科会で意見の一致をみなかった、両論併記しか書けなかったものだけでいいんじゃないのかなと思うんですよ。現状、今、そういうことですよ。

だから、それでいいんじゃないですか。

○ 豊田政典委員長

そういうこと。

○ 諸岡 党委員

簡単に言えば。

○ 豊田政典委員長

副委員長、ちょっと整理してください。

○ 中川雅晶副委員長

今言っておられるのは、今の現状も分科会とか委員会を重視しているので、そこで決定されたことをあえてもう一回ということはしていないということで、それに基づいて、これもしたらどうやということですよ。

○ 諸岡 党委員

形の上では、ペーパーとして上げる必要はあると思いますよ、当然。だけど、取り上げて議論する必要性があるのは、あくまでも分科会で意見の一致をみることができなかったものでいいと思いますけど。

○ 豊田政典委員長

私はちょっと違いますけど、中村委員に近いですけど、これって、ここまでやらなあかんですか、この特別委員会で。何か、決算常任委員会、予算常任委員会の理事会みたいになってきていますけど、そこまでやらんでええんと違うのかなと思いますけど。

○ 加納康樹委員

ですけれども、この目の前に迫った8月定例会議会の決算審査のことを思うと、決算常任委員長もいらっしゃるのでご心配かと思うんですが、この提言シートというものを、ゴ一が出るとしたら、じゃ、本当に、その取り扱いをどうするのというものの方向性ぐらい導き出しておいてあげないと、それで決算常任委員会の理事会なりなんんりの確認も要るんじゃないのかなって。

でも、諸岡さんの言うとおりで、決算常任委員会の全体会で蒸し返す必要はないんだけど、その全体会でこの提言シートというものは確認をするということを、決算常任委員会の中の申し合わせに組み込む必要があるんじゃないのかなと思えているんですけど。

○ 豊田政典委員長

いずれにしても報告して通すのは確かですよ。異論が出て修正するのかどうかは別にして。

ちなみに、今年度はこれ、影響しませんので、来年度からの話なのでいいんですけど、とりあえず預からせてください。余りにちょっと、細かくなってきたので。正副委員長でも、また、事務局とも話を整理します。

○ 伊藤嗣也委員

このところで、その提言シートと附帯決議というのは、決算常任委員会の全体会の場合、その分け方も少し正副委員長でご検討いただければと思うんですけど。

○ 豊田政典委員長

そうですね。わかりました。

○ 伊藤嗣也委員

お願いします。

○ 豊田政典委員長

それは預かります。

そろそろ休憩したいんですけど、きょうのところの決算審査と予算審査を連動させるサイクルの議論はここまででいいですか。

休憩後に二つ目のサイクルツアーについて、時間があれば任期についても入っていきますので、それじゃ、休憩、午後3時まで休憩させてください。

14 : 46 休憩

○ 豊田政典委員長

それじゃ、おそろいですので、委員会を再開します。

ここからは、二つ目のサイクル、サイクルツー、各常任委員会の中のサイクルというところですが、映してもらうのは、配ったけど配信していないやつ、大、中、小のやつを映しておいてください。

お手元に配らせてもらった、これなんかを見ながら、このサイクルについて、各委員、各会派、団体の意見をまた教えていただければと思います。どうでしょうか。

修正をしましたので、前回の中で、一番最初のテーマ設定の部分、最初の提案から少し変えてきた、大、中、小、いろいろあるじゃないかと変えました。会派へ持ち帰ってもらったリベラル21さんなんかはどうですか。

○ 加納康樹委員

ぶっちゃけのところ、ちょっとこのイメージまでのところを伝え切れていないので、済みません、何とも今、申し上げようがないです。

○ 豊田政典委員長

悪くはないでしょう。もう一回、大、中、小の例、出しましょうか、総合計画の中で。要らんですか。じゃ、出してください。例えば大、中がどういうものか、映して。

その間、何か意見がある方は。

○ 諸岡 覚委員

おおむね前にここで出されたことについては、会派としてはおおむねいいんじゃないかな。細かいところであったんだけど、ただ、きょうの説明で、大、中、小でそれぞれ対応できるという話がありましたので、うちの会派はこれですとします。

○ 豊田政典委員長

ありがとうございます。

今、大、中、小の例を出してもらいましたが、前回、伊藤委員から現状、所管事務調査

のテーマをいろいろ複数出されると、それを一つにまとめるのは難しいのでという意見も冒頭のほうでいただいたんですけど、これ、小に当たるのかなと思うんですけどね。これは、それでやってもらえばいいけれども、いろいろやろうと思うと大変になりますから、委員会も。どこまでできるかは、各常任委員会、各常任委員長の采配でいいと思うんです。何本やるか、どういうものを深掘り、どこまでやるかはね。

もう一回、おさらいになります。大テーマで、例えばこれは、現状の総合計画の5本柱のうちの1本目、都市と環境が調和するまちという5本柱の1本柱。大テーマというのは、例えばこれ、既成市街地や既存集落の有効活用、これをやろうよと、これをじっくりやろうよとなる場合は、大テーマというくくりです。

中テーマと言っているのは、そのもう一個下で、例えば、どれでもいいんですけど、コンパクトシティについてやっていこうというのが、これが中テーマ。

小テーマというのは、現状でよくやられているような、個別事業をたたいてみるとかということに当たると、そんなイメージで資料をつくっております。

特にないですか。土井議員からもあって、最初のころは正副委員長案が2年間同じテーマでしていましたが、変えました、皆さんの意見を聞いて。

○ 土井数馬委員外議員

ただ、例えば、今ので基本的政策の1を1年、2年かけてやろうとすれば、その下のやつを全部やっていかなあかんわけでしょう、どっちにしたって。それをやっていかなあかんのやで。どっちから入るかとか、いろいろあろうかと思えますけどね。よろしいんやないですか。

○ 豊田政典委員長

ありがとうございます。

イメージはつかんでいただいたと思うので、こんなことで、繰り返しですけど、これをテーマに置いて、それを視察にも生かしていただき、シティ・ミーティングやさまざまな意見募集とかからも市民の意見を取り入れながら、また、利害関係者と意見交換するとか、いろんなやり方があると思うので、その辺は各常任委員会の裁量でできるんじゃないかというサイクルでございます。

そんなところですか、これはね。まあまあ、よろしいですか。結構いいでしょう。これ

でよしとするわけじゃないんですが、私、いろいろ考えていきますところ、ぶっちゃけ、この二つのサイクルをやろうとして、委員任期2年に結びつくんじゃないかという、最初の正副委員長と事務局との打ち合わせがありました。きょうの議論の中で、そのつながりも出てきた意見も、考え方も新たに出されましたけれども、任期の部分、やっぱりここをじっくり議論して、これらのサイクルとうまく結びつけばいいし、任期のことを考える場合には、いろんな要素があるので、サイクル以外の考え方もあるだろうと。必ずしもサイクルがあるから2年というだけじゃないのかなと、いろんな考え方があります。

ここからは、任期について、また皆さんと議論したいと思いますので、大きく常任委員、それから、正副議長、そんなことになりますけど、今までの資料を見ていただくとすると、会議用システムの中の98の任期関係というところにあります。単純な資料ですけども、前回示させてもらったのは、極めて単純なパターン分けを示したやつで、せっかくなので、そうしたら、正副議長について前回いただいた意見の中で、1年と複数年のメリット、デメリットを1回出し合って議論をしようよという意見をいただきましたので、手持ちで整理しました。配ってください。正副議長から行きます。映してください。

今配ろうとしているのは、正副委員長の主観でいいので1回書いてみろということをお願いいただきましたので、ざっと見ていただいたとおりなんですけど、説明していきますと、正副委員長もありました。正副議長については、我々が考えたメリットは、対市民、市民にとっては認知度が2年のほうが当然上がる。市民に対する発言力というか、言葉の重み上がるだろうと。それから、対行政、2年化したほうが、監視力というのはチェック機能だと思ってください、そのチェック機能、指導力が上がる。政策サイクルとの関係でいえば、正副議長は2年のほうが――正副議長というか、主に議長やと思いますけれども――合意形成がスムーズになるのではないかと。政策サイクルを回しやすくなる。議会内での合意形成がスムーズになる。その他、より深い改革の提案や遂行ができる。1年目の経験を2年目に生かせる。議長会に対する発言力が増す。デメリットとしては、経験できる議員が減る。これが一番でかいですよ。これが正副議長、ざくっとこういうふうに整理してもらいました。

正副委員長については、メリットは対行政について、議長と同じですけども、チェック機能や指導力が上がる。重複資料作成、説明が避けられる。政策サイクルの関係は、読んでもいいですね、読んでください。

一つの見方だと思っていただいて、ほかの意見もあるだろうけれども、正副議長から行

きますか。この中にも、正副議長経験者が何人かいますので、経験を踏まえて、何か皆さんに指摘いただくとわかりやすいかなと思うし、やっぱり経験していないとわからない部分もありますから、どうでしょうね。一番回数の多い中森委員あたりに何か参考になるような話をしてもらおうとありがたいなと思うんですけど。

○ 中森慎二委員

一つは、今、議長の所信表明演説に伴う議長がやりたい議会改革なり、いろんな取り組みが、単年度の場合は特に予算を大きく伴うものについては任期中には実現が非常に難しいんですね。そういう意味では、2年という任期が担保されると、その2年間の任期の中にそういうものの取り組みが形として出てくるんじゃないかなと。

昨年、豊田委員長が議長をされたときも、こういった決算常任委員会の政策サイクル的なところも取り組まれたけれども、やっぱり2年やったらもっと違う形になったかもわからないですね。だから、そういった部分は1年であればやっぱりデメリットも、2年になればその実現性も高まるというふうには思うんですけどね、一つは。

○ 豊田政典委員長

確かに去年、市民アンケート、高校生アンケートとか広報広聴委員と一緒にやらせてもらったんですが、予算がなかったんですね。120万円の予算がなかった。捻出するというか、予算がない中でかなり苦勞をかけたというのもありました。

加納元議長はどうですか。

○ 加納康樹委員

確かに議長は2年のほうが、この特別委員会でも資料があったように、少なくとも2年やっている議会のほうが最近多いぐらいですので、やっぱり対外的なところも含め、それは必要なのかなという思いは持っていますというぐらいです。

○ 豊田政典委員長

僕は1年やりましたが、次から次へと初めての経験が出てくるじゃないですか。これに対応するというか、それに追われちゃうのでね、どうしても時間的にも意識的にも。だから、もう一年あれば、例えばあのときはこうしておけばよかったみたいなやつが、かな

り悔いが残っているというか、この辺はぜひ本音の部分聞かせてもらおうとありがたいんですけど、副議長経験者の諸岡委員はどうですか。

○ 諸岡 党委員

正副議長の任期の2年化という前提の話なんですけれども、私は別々で考えてもええのかなと思ってまして、ある意味、副議長という役職というのは、今後いつか議長になっていく過程の中において、その経験を積んでおく、練習しておくという、そういうポジショニングでもあると思うんですよ。そう考えていくと、副議長というのは、いろんな人が交代でという言い方は語弊があるのかもわからないけれども、適切な時期に適切な人が副議長を経験しておいて、将来の議長候補というのはたくさんいるにこしたことはないわけですから、それによって、より競い合って、その年、その年、一番よいと思われる議長が選ばれていけばいいんだから。副議長に関しては、この2年任期からちょっと別視点で考えてもいいのかなとは思いますが。

○ 豊田政典委員長

ほかに何か。議長を見ていてとか、副議長をやってみて感じたことはないですか。任期について。

○ 諸岡 党委員

それは、もう今は中森委員や加納委員がそれぞれ経験者としては言われたので、それでいいのかなと思いますけどね。私がとやかく言うことではない。

○ 豊田政典委員長

政友クラブさんは正副議長経験者、たくさんいるんですけど、会派でどんな意見があったり、また、見ていてどういうことを感じているか、任期についてどうですか。

○ 中村久雄委員

うちの会派では、この任期については、2年やろうと思えば2年できる、今の現状はね。仕組みの中でも別にできるので、常任委員会も全部ひっくるめて、今の現状が一番いいのではないかというふうに。だから、変にこう2年というふうに縛ってしまったら、議員の

持っておる自由度が狭まるというところで、やっぱり自由度を狭めてしまって縛るのは、これはちょっとよくないような気がするというところで、今の現状が一番いいんじゃないかという意見です。

○ 豊田政典委員長

今、議長の話なんですけど、議長、副議長ね。今やろうと思えば連続でもできるので、副議長は余り考えにくいですけど、今のがいいんじゃないか。自由度って何がいいんですか、1年の議長は。

○ 中村久雄委員

いや、1年の議長がいいとか悪いじゃなくして、今の制度で、自分がやりたいと、こういうことがしたいんやったら、それで立候補して、もう一回出れるんじゃないの。それでいいんじゃないかということです。2年って縛りをつけるよりも。

○ 諸岡 党委員

要するに、周りが認めてもらえばできるということですね。

○ 中村久雄委員

そうですね。だから、それだけ自分がやりたい、例えば去年の議会改革、こうしたいとか、今までの所信表明でやったことが達成できていないと、なかなか道半ばやという部分で、それを訴えて、していったら2年できるやないか。2年でも3年でも。そういう仕組みはあるんだから、反対にもう1年で、こんなあっちこっち本当に忙しい1年やった、もう十分やという人もいらっしゃるかわからんし、という意見です。

○ 豊田政典委員長

ありがとうございます。

わからんのですけど、今、議論しようとしているのは、より議会力を、議会の全体の力を高めよう。今、我々の主観ですけれども、こういうメリットがあるんじゃないかと出した。それから、経験された方からも出された。そこまでの議論はされていないかもわからんのですけど、何か中身がよくわからないです、僕。今でもできるから、それでいいんじ

やないか、それじゃ何も変わらへんじゃないですか。より議会の力を高めようとして、この会議をやっているのもあってね。それが今でもできるから、今でも政策提言できるやないか、委員も2年できるやないか、それでは力がないから、この委員会をやっておるわけですよ。今でもできるんですよ、何だって、4年やってできるんや。そんなことやったら、この会議の意味がないんと違うの、これ。

○ 中村久雄委員

おっしゃるとおりで。おっしゃるとおりだと思うんですよ。この会議をつくったのも、各派代表者会で認めてつくっておるわけやから。

○ 豊田政典委員長

本会議でも出ました。

○ 中村久雄委員

だから、この任期については、任期についてというか、そういうのは、やっぱり自由度が狭まると非常に何か危機感を持っておった。そういうふうなニュアンスですね。

○ 中森慎二委員

その自由度の話は、僕は議員個人の話の領域だと思うんですよ。我々が今議論しているのは、委員長が言ったように、議会の権能、議長の権能をどう高めるかという位置づけを上げるために、我々も身を削る思いがあるわけですよ。議長になれずに議会を終わっていく人も出てくると思うんですよ、そうなればね。チャンスが当然減るわけですから。でも、それも踏み込んで、議会全体のレベルを上げていこうと、権能を上げていこうとするための改革に踏み出すかどうかの話なので、なので、僕も諸岡さんが言うように、副議長の任期と議長とは分けるべきだと、分けたほうがいいと思います。副議長の経験は多くの人にやってもらったらいと思う。でも、その中でも、議長の位置づけを我々がどう高めるのか、忙しい1年だったから、もう1年でええわという話ではなくて、能力のある人は2年やってほしいわけです、我々も、そういう意味では。それが四日市市議会の改革の旗頭になる議長さんが、どういう2年間を過ごしてもらおうかというのを我々が担保しようと、制度としてね、2年間を。もちろん今でも2年連続で立候補していけばできるじゃないか。

そのとおりだけど、でも、少なくとも2年間というフレームの中で、サイクルの中で議長の仕事をしてもらおうという改革に我々が踏み出すかどうか。だから、これは我々の中にも痛みはありますよね、当然。なれない人が出てくるわけですから。だけど、それは改革を踏み込むためにやっぱり汗を流さないといかんところじゃないかなと思うので、だから、僕はより、政友クラブさんの中にも議長経験者の方がたくさんみえるので、そういう方からこそ、そういう発言をぜひ引き出してほしいなと思うのと、そんなところですよ、済みません。

○ 中村久雄委員

だから、2年任期ということで縛るよりも、今の申し合わせで、1年で辞表を提出というのが、どこにも書いていないと思うんですけど、暗黙でありますよね。そういうのをやめようよということにしたらどうかなと個人的には思うんですけど。だから、辞表を必ず出しますよね、皆さん。だから、自分のやりたいこと、そういう部分がまだ道半ばだったら、辞表を出さずに……。

○ 諸岡 覚委員

要するに4年任期でってこと。

○ 中村久雄委員

4年任期が法的に決められていることでしょう。だから、4年になるか、2年になるのか、もうこれは、もう俺の番は終わった、俺の仕事は終わったと2年でやめてもええし、3年でやめてもええし、というのは、あと、皆さんが認めるかどうかの話はありますけどね。そういう部分で切磋琢磨するというのは……。

○ 豊田政典委員長

先ほど少し興奮してしまいました。済みませんでした。委員の皆さん、ご苦勞をかけているというのはわかった上でしたが、少し感情的になりまして、声を荒げまして。

今の発言は、諸岡委員が言われるように、そうすると4年になってしまうと思うんですよ。やりたい間はできる、やりたいことが残っている間は辞表を出さなくなると4年と同じになっちゃうと思う、制度的には。

ほか、土井議員。経験者でございますが。

○ 土井数馬委員外議員

2年って、僕も中村さんの意見とほぼ一緒だったんですけれども、単に2年にする場合、やっぱり選考時というか、議長選挙というか、2年できるような能力の人を選ぶ必要があるわけですよね。今まで、順番でとか、手を挙げて多いところが勝つとかね、そういうふうな選考状況とは変わってくると思うんですよ。やっぱり、さっきも中村さんが言うておったように、本当に任せられるような人を選ばなあかんし。だから、今までのような選び方とは全く選考方法が変わってくると思うんですよ。そういう根本はやっぱり押えていただきたいな。それであれば、2年制、別に何の問題もないと思います。

あと、副議長はさっきの、今でも副議長経験者が議長選挙に出れる権利があるというふうなのが、一応暗黙になっていますわね。ならんときもありますけれども、そういうふうになっていますから。その辺はもう副議長は1年で僕はええと思いますけどね。

あと、このメリットのところ、ここにはないですけど、対議会というのはあるわけですよ、やっぱり。対行政とかなんて、議会の中で調整していく、まとめていくというのが2年目になるとやっぱりまとめやすくなるんじゃないかなと、そんな気がします。2年制にしたことはないですからあれですけども、やっぱり対議会というのは非常に大事でね、やっぱり、まとめていくというのは。やりやすくなるんじゃないかなと今ちょっとふと思いましたので。

○ 豊田政典委員長

なるほど。私も自分の話ばかりで申しわけないですけど、余り議会全体で説得した経験がなかったんですよ、去年まで。それが、去年1年の中で、そういう場面が何回かあったので、初めて各会派の皆さんを説得しなければいけない、それは貴重な初めての経験だったので、もう一回やればもっとできるんじゃないかというような思いもありますよね。どうでしょう。

○ 諸岡 党委員

今の議論というのは、全体的に議長が能力の高い人、優秀な人という前提の話なんだけれども、時と場合によっては、そうでない方が議長になるケースもあり得るわけなんです

よね。それが結構怖いなという思いはあって、私は、議長の2年制というのは賛成だし、進めていくべきなんだけれども、そこに一つ怖さがあって、言ったら何ですけれども、あかん人が議長になって、これ、このまま2年やっていくんかというケースになったときに、言ったら何だけれども、1年終わった段階で、辞表を出すのもやぶさかではないという、そこで、言ったら何だけれども、水面下でそこのお互いの会派の代表が、もうちょっとお前、ことし辞表を出したらどうやと、肩たたきみたいなことも、もうぶっちゃけた話ですけれども、その道はちょっと残しておいてもええんかなと個人的には思います。2年任期がベースなんだけれども、1年目で辞表を出すのもやぶさかではなしというのはちょっと残しておいていいかなとは思いますが。

○ 豊田政典委員長

どういう決め方になるんですかね。2年にもししたとして、申し合わせなり、議長は2年の任期とすると書いて。

○ 諸岡 覚委員

書けないでしょう、そもそも。

○ 豊田政典委員長

書けやんのか。不文律でもいいけど、決めたとして、辞表なんて全部出せんのやもんね、誰でも。1年任期でも。

○ 諸岡 覚委員

まあ、そうですね。

○ 豊田政典委員長

その辺、どうなのかね。確かに、言われることはわかりますよ。1年より2年は長い。能力っていろんな能力があるのでようわからんのですが、議会が何かたがたになってしまっていると、そのときどうするんだみたいな。

○ 加納康樹委員

諸岡さんのご心配もごもっともとは思いますが、その前に土井さんがおっしゃったように、そうなったら、きちっと議会として2年託せる人を選ぶというところから入るはずなので、もしそんなことが起こったら悲しいかな、諸岡さんが言ったようなことをやってもらわなアカンですけど、やっぱり私たちの特別委員会、議会改革特別委員会としては、2年制の議長をというところだけ決めておくとしておかないと、三重県議会のことを笑えなくなるのでと思います。

○ 豊田政典委員長

下手に変えて書くというか、決めちゃうとどうでしょうね。確かに選び方は変わってくるだろう、意識がというのは想像にかたくないですよ。

太田委員なんかのところの議論はどうですか。

○ 太田紀子委員

正直言って、会派というか、豊田祥司議員とした中では、別にそんなの決まっているわけじゃないんだから、わざわざ2年って決めなくても、やりたかったら2年やればいんじゃないかという、そういう意見だったんですけども、私としては、前回、120周年の豊田委員長が議長のときのあれを見ていると、議会改革であったり、そういういろんな部分で、もし続けてやられたらどのぐらい変わるのかなとか、どうなっていくのかなというすごく思いがあったもので、2年ってありきじゃないかな、逆に2年あれば議長になってもらった方の所信の思いがある程度形にできるんじゃないかなと思ったときに、2年ありきのほうが、2年のほうが有効かな。

それと、あと、議長を選ぶ際にしても、この人なら仕事ができる、やってもらえるという人、そういう選ぶ目も変わってくる。順番とかそういうあれよりも。

副議長については、別に1年交代で経験をする、議長の仕事振りを見てもらうという意味でも、1年でいいと思うんですけども、やっぱり議長というのは2年であるべきじゃないかなということも昨年痛感いたしましたので。

○ 豊田政典委員長

副委員長のところはどうですか。

○ 中川雅晶副委員長

そうですね。今現在でも、2年やろうと思えばできるという意見もこの間あったときに、危惧していたんですけど、それは議員の中ではそういうことも理解はできるかもしれないんですけど、これ、対市民に対して、現職が辞表を出してもう一回立候補をするというのは、なかなかこれは対外的に見て、市民から見たらとっても不思議な感じなので、それはちょっと厳しいやろうというのと、それから、やっぱり本当になっていただきたい人が2年やっていただくのはいいんですけど、なかなか厳しい状態になったときに、2年はきついなというのは確かに会派の中では議論があるので、そのリスク管理をどうするかというのを少し担保しておかなければならないんじゃないのかという意見もあったのは事実です。

○ 豊田政典委員長

最後のところは諸岡委員の意見にも通じるし、前回かその前に土井議員も言われたところですよ。きょう別に固めていくつもりはないんですけども、きょうの議論をまた会派に伝えていただいて、さらに議論をしていただきたいと思いますが、今の部分、どうですかね。加納委員も言っていましたけど、中森委員、どうですか。2年にしてしまうと不安な部分もあるので。

○ 中森慎二委員

四日市市議会の歴史をずっと見てみると、複数年やっておる議長さんって、みえるんですよ、さかのぼると。これは何に基づいていたのか、ちょっと僕もわからないけど、相当前ですよ、僕も入った後ではないんですよ、過去をずっと見てみるとね。結果として続けてやってみえる方はみえますわ。

ただ、それがどうこうというんじゃなくて、今、私、小林議員以降の部分では、2年制度というものはない中で来ていて、小林さんが44年ですか、今。44年になるのかな。44年前、半世紀近く、そういう2年制というものがない状態で来ているわけですよ。だから、もう大改革ということですよ。だから、いろんな意見が僕はあると思う。だから、この2年制を議長が取り組むことが大きなシンボリックなものにも僕はなるのと、そのことによって、議会全体の底上げに私は必ずなると思う。

選び方とか、いろんなことで問題はあるけれども、もし2年制を導入して、1年で議長に大きな問題があるなら、不信任を出せばいいじゃない。

○ 豊田政典委員長

不信任ね。

○ 中森慎二委員

我々にはそれがあるわけですから。

○ 豊田政典委員長

権限がね。

○ 中森慎二委員

そうそう。議長にやっぱりふさわしくないと。もし大きな問題があるのであればね。だから、その前段で、選び方については土井さんが言われるような、慎重に我々が2年間任すリーダーを選んでいくという、みんなの認識をそこに大きく変えていかないと、従来の延長線上で2年だけ持ち込んできても、これはなかなか僕は難しいところはあると思うけど、皆さんがそういう認識を変えるという前提の中での2年制を取り組もうということではないと、なかなかこれは難しいのではないかなと思うけれども、ぜひ私はやるべきだと思います。

それで、やっぱり改選期でないと、無理ですわ、これは。

○ 豊田政典委員長

やるとしたら、そうですね。

○ 中森慎二委員

だから、取り組むとすれば、今回は一つの大きなチャンスであると思うんですね。

○ 豊田政典委員長

今言っていたように、簡単に言えば最後のチャンスだと僕は思っています。2年制に踏み切るかどうか。この委員会で開いて議論をして、だめだとなったら、当分できませんから、少なくとも10年ぐらいいは、10年というか、3期ぐらいいはもう無理ですね。最後

のチャンス。改選もあるし。

○ 中川雅晶副委員長

あと、不文律みたいなものがあって、副議長を経験して議長になるとか、また、委員長は大体2期の議員がなって、1期が副委員長になるとか、この不文律が少し僕は弊害の要因かなと。例えば、極端なことを言えば、議長経験者が副議長になっても別にいい場合もあるんじゃないかなって。例えば、議長をサポートするということがあってもいいんじゃないですか、極端なことを言えば。委員長も、例えば4期、5期の人が委員長をしてもいいと思いますし、また、1期が委員長になってもいいと思いますし、それはその何となくの不文律で決めていくというような慣例みたいなものを少し打ち破るということも同時にしていかなきゃならないんじゃないかなと思うんですが、いかがでしょうか。

○ 豊田政典委員長

ほかに。

○ 土井数馬委員外議員

これまでの議論もそうですけれども、やっぱり、この特別委員会でもう2年と決めるのなら、決めて、そのまま提案すればいいと思うんですよ。あとのいろいろ出ている細かい選考の仕方も変わってくるだろうし、いろんなものが変わってくる、それはここで議論するものではないと思います。ただ、こんな意見が出ていましたよという形で、皆さん同意が得られれば、特別委員会として堂々と2年って上げていけばいいと思います。

それと、何年か前かわかりませんが、議会改革があったときに、議長選挙、大幅に変わったわけですね、立候補制になって、誰でも出れるようになって、僕も出ましたわ。1票しかなかったですけどね。やっぱり思い切ったことも要るんじゃないかなというふうに思いますけれども、議会改革をして誰でも立候補ができるといっても、やっぱり古い慣習は残っていましたですよ。さっき副委員長が言いましたように、そういった縛りは一遍なしにするのもいいと思う。でも、それを決めるのはここではないなというふうに思います。こんないろんな意見があって、結論的にうちとしては2年なんやというふうな進め方を委員長にしてもらうのがいいんじゃないかなとは思いますが、これは意見ですけど。

○ 豊田政典委員長

ありがとうございます。

いろいろ考えさせていただくような意見を出していただいて、ありがとうございます。中森委員の言われた中の、歴史的にも議長をもし2年にしたら、大きな変化、改革になると思うし、そこから波及する影響というのはかなりでかいんじゃないかな。選び方にしろ、議員意識、市民意識、執行部の意識。だから、政策サイクルももちろん大切なことですが、この改選を経て、新たなステージに四日市市議会が行こうとするときに、ここが最後のチャンスだと思うんです。ここでもいろいろなことを、犠牲じゃないんです、いろいろな事情はあるけれども、大きな一步を踏み出せば、必ず四日市市議会の改革というか、議会が大きくぐるぐる回り出すと思うんですよ。だから、ぜひ僕は2年論者ですけども、皆さんのほうでも、さまざまなことを考えていただいて、どうすれば議会、四日市市議会がより市民の皆さんから見て信頼できる議会になれるかということ、もう一度議論していただきたいなと思います。

○ 土井数馬委員外議員

さっき議長の2年制のときのメリットのようなことを言いましたけれども、やっぱり最終的に委員長が対議会をどうやってまとめてくれるかということだというふうに思うんですよ。ここで決めたって、あとたくさんの方がみえるもので、そこでどうまとめていくかがポイントになってくると思うもので、その辺をじっくり正副委員長で練っていただきたいし、この中でもいろいろな意見がありますけれども、最終的にそう委員長が思って、皆さんも2年のことにそう大きなあれもないみたいなのであれば、あと残っている方をどうまとめていくかという、今、皆さんが会派に持ち帰ってはおりますけれども、なかなか難しいんじゃないかなというふうな予想をするものですから、その辺、またちょっと考えておいてもらいたいなと思います。

○ 豊田政典委員長

それは考えているんですけど、それはぜひ皆さんに、ここの特別委員会で合意ができれば、皆さんに託すというか、力をお借りするしかないなので、もちろん正副委員長もできる限りの汗はかきますけど、これはもう各委員の皆さんに力を貸してもらわな何ともならん

です。ともに合意できたことについては、各会派を説得していただくということをしてもらわないと、これが委員だと思いますから、会派へ持ち帰って、会派にいろんな意見があって、ここで議論する。議論するというのは何のためにやっているかという、ほかの会派の意見を聞いて変わるために議論しているんだから、それは変わってもいいと思うんです。会派の意見は大半がAだったけど、ここに持ち寄ってBに変わったと、議論の中で。これが会議ですよ。それで、そこでまた、Bの意見を各会派で説明して、説得してもらわなアカン、できる限り。これは難しいです。だけど、これが委員ですよ、各会派から出てきている。大変難しいし、我々ももちろん、そのときに役に立てば、呼んでいただければ一緒になって説得しますから。そういうことで頭を痛めていますので。

○ 土井数馬委員外議員

結局、委員長のおっしゃるとおりで、やっぱりここで合意形成していかんと、もう進みようがないわけですので、お互いに努力していただいて、進めていくしかないのかなと思っています。1回で決められませんし、会派によっては長くかかる場所もありますし、そこをどうしていくのかなと、ちょっと心配をしておるだけですけど。

○ 豊田政典委員長

ぜひ無所属クラブさんもよろしくお願いします。

○ 中村久雄委員

目に見える形でシステムを、仕組みをつくっていくんやというのはよくわかっているんですけども、今副委員長がおっしゃった目に見えない不文律、これをなくすというのは、物すごい大きな実際の改革かなと。実際に今ある仕組みの中でも、皆さんが認めたように、これがちゃんと動けば、すごい議会としての力が出るというのは、もう皆さん同じ意見やと思うんやけど、それがなかなか力が出にくいから、何とかシステムの目に見える形にしていこうというのがこの議会かようわからへんけど、この目に見えない不文律を四日市市議会は全くないぜというのも、これはまた一つ大きな議会改革かなというような感があるんですけど、これは次回ということ。

○ 豊田政典委員長

難しいところですね。

○ 中森慎二委員

不文律の話は絶対的なものではないですよ。現実的に、中川副委員長がおっしゃったところも、そうでないフレームの中で決まってきたことも過去ありますよ。ですから、そういう空気、定まったものでもないけれども、何か空気感みたいなところで残っている慣習的な、そういうふうなものは、この際はっきりしたらいいんじゃないんですか。

だから、例えば議長に2年制を例えば導入したとすると、そのために必要なことを、周りの整備はまた別のところでちゃんとしてもらおうと、そういう提言だけは我々が一筆残せばいいんじゃないですかね。そういった慣習、慣例的なところで、やっぱり時代に合わないところもあると。それについては、積極的に見直すと、こういうことも一文入れることによって動く一つのエンジンになっていくんじゃないですか。そのために我々がここにあるんじゃないかなと思うので。そういうのをどんどんやっぱり出してもらって、問題点は変えて、やっぱり全体としての議会改革の組閣をしていくというふうに、これはもう全然賛成やと思いますし、いいことだと思いますよ。

○ 諸岡 党委員

ちょっともう雑談レベルのよた話になってしまうんですけども、私、どうしてもロジックをきちんと、すきのないロジックを構築したい派の人間やもんで、不文律のない議会を目指すのであったら、やっぱり法律で4年って定められておるものを、今、2年と短くしようということを不文律で今決めようとしているわけじゃないですか。そこに全く真逆の方向性が働いておって。

言うておることはようわかる。みんなの言うておることはようわかるんやけど、ただ、ロジックとして考えると、そうすると議長任期もへったくれもないわなという話になってくるんですよ。これが困ったなと思うので。だからといって、どうしたらいいという案はないんだけど、今、我々がやろうとしているのは、法律に逆らって不文律を決めようとしているということなんです、やろうとしていることは。しかもそれを明文化できないという中で、そこでパラドックスを感じます。

○ 豊田政典委員長

何とか明文化できないかなと思って、なかなか厳しいなというところですね。

それはちょっとさておき、きょうのいろいろ出された意見はまた整理しますが、会派に持ち帰って伝えてください。空気感も伝えてください。もう少し、今、議長、副議長をやっていますが、きょうの政策サイクルにも関係するところの正副委員長と常任委員ですね、委員と正副委員長、ここについて残りの時間、午後4時までください。午後4時まで皆さんの意見、またお聞きしたいなと思うんですけど。まずは委員からかなと思ったんですけど。

○ 諸岡 党委員

時間がないので、ちゃちゃっと申し上げますと、まずは委員の任期については2年任期、このサイクルに基づいてやっていくという前提であれば、2年任期にして当然しかるべきなのかなと思います。ただ、委員長、副委員長というポストについては、やっぱり私は副議長のところでも言ったように、人を育てていく、経験させていくという部分でいうと、ここはちょっと2年固定にあえてこだわらなくてもいいのかなと思います。

○ 豊田政典委員長

副委員長。委員長もですか。

○ 諸岡 党委員

うん。委員長、副委員長については。

○ 豊田政典委員長

正副委員長とも1年でいいんじゃないかと。

○ 諸岡 党委員

そうです。ただ、2年の再任は妨げないというぐらいで。

○ 豊田政典委員長

今のご意見でいくと、常任委員は2年だけど、例えば8人いて、1年任期の正副委員長がいると。それで、8人の中から選ぶんだから、2年連続でやってもいいし、1年でもい

いと。

○ 諸岡 党委員

そういうことです。

○ 豊田政典委員長

委員は2年。

ほかの方、どうでしょう。

○ 中村久雄委員

うちでは、先ほどの正副議長と同じように、2年で縛らずに、今でもやりたかったら2年いくし、今のままがいいんじゃないかというのと、2年で縛ったときの2年後の委員の、自分の行きたい所管に、この2年たった後、ごろっと変えるか、それは今と同じような決め方で、やっぱり自分の持っているテーマで選べると。持っているテーマなり、会派の中の構成で行く常任委員会は決められるということなんですよね。全くもう全然別の構成にしよう、委員構成には全然考えていませんよね。

やとしたら、今のままでも半数ぐらい、半数というか、まるっきり今でも常任委員会の委員がごろっと8人、9人が全員変わっているわけではありませんので、今の中でテーマを引き継ぐと。ましてやこういうふうにもし政策サイクルが出てきたら、俺はもっとあそこに突っ込みたい、もっともっと意見を出したいわと、研究したいわという部分で残っていく部分もあるのかなと。だから、議員の自由度を縛ってしまったらあかんという意味で、やはり現状がいいんじゃないかというのが今のうちの会派の意見なんですよ。

○ 豊田政典委員長

いいんじゃないかという、いいというのは、自由だからというだけですよね。ほかのメリットはないですよ。

他の委員の皆さんはどうですか。

○ 加納康樹委員

済みません、ちょっとこの委員とか正副委員長のところまで、会派としてオーソライズ

はされていないので、また次回までに最終は、この雰囲気も伝えてとっていますが、個人的には冒頭で諸岡さんが言ってもらったように、せつかくこのサイクルから流れてきているので、委員の任期は2年はありだと思います。

それで、委員が2年間同じメンバーになるというのは、やっぱり何とんでもこれは対行政のプレッシャーというのはかなり上がると思うので、やはりその点で、ぜひそうすべきだと思いますが、でも、じゃ、委員長、副委員長まで固定していくことが対行政という、それは余り関係ないのかなと思うので、なので、委員は2年、正副委員長は1年でもかかわっても構わないぐらいがいいのかなと、これは個人の意見ですが、そう思っています。

○ 太田紀子委員

やっぱり会派で話したときには、やっぱり自由でいいじゃないかと、今でも2年いたい人は2年いられるしという話が出たんですけど、私としては、こういう流れを考えたとき、前回、スピード感を持ってという話を私もさせていただいていたんですけど、やっぱり提言をせつかく出すんだったら、今回反映されないんだたら次という、やっぱり2年という時間って大切というか、必要であると思うし、諸岡さんや加納さんが言われたとおりに、委員は2年、正副委員長はの中で考えればいいことであって、その各常任委員会で。やっぱり2年というのを基本で考えていくのが、この今の提案を、提言とかそういうのを生かす上では必要かなと考えております。

○ 豊田政典委員長

ありがとうございます。

副委員長のところはどうですか。

○ 中川雅晶副委員長

私のところも、常任委員会の任期はやっぱり2年とすべきであろうというところで、確かにメリット、デメリットもあるし、今でも自由度があるといえはるんですけど、でも、今回やろうとしている議会改革のことをやろうと思えば、僕はやっぱり2年にしなきゃいけないのかなと。しかも、今の委員会条例の中で1年となっているのを2年とすることになるので、これはロジック的にもしやすいのかなと。委員長、副委員長については互選となっているので、これはメンバーの中で互選をして、例えば1年たったときに互選をして

いただくということもロジック的には可能なのかなと思うので、その辺は委員会の判断で、委員長、副委員長は決定いただければなというところがあるので、とりあえず委員の任期は2年とするというところは会派としても可となっている部分であります。

ただ、意見としては、実質的には互選ではなくて役員選考委員会で決めているので、その整合性だけはきっちとしてくださいというのが意見としてありました。

○ 中森慎二委員

これも私個人の意見ですが、委員は2年制でいいと思います。要は、委員会での約8人のメンバーで2年間、委員会として掲げたテーマについて、一緒のメンバーで議論し、提言をまとめていくというその新しいフレームを実行するために必要な任期が2年制であると、そういう理解の中で取り組めばいいんじゃないかと。正副委員長については、その8人の中で2年やっていただければ一番いいと思うし、1年で交代しても、それは大変なのでということであれば、それでも、8人みんなが協力し合う中で目的を達成していくと、そういうチームとしての部分が実行できればそれでいいのではないのかなと、固執する必要はないのではないのかなと、正副委員長についてはね。

○ 豊田政典委員長

何か、僕の個人的な感覚ですけど、1年間同じメンバーで今やっていますよね。3月の予算常任委員会が終わって、割と一体感がそれぞれの委員会で生まれておるような流れがあると思うんですよ。この一体感ができたメンバーでもう一年やれば、より委員間討議もしやすいし、意見集約にも近づいていくのかなという思いは、僕はあります。チームと言われましたけど、まさにそういうチームが1年かけて今はできているけど、さようならというような感じですよ。

土井議員はどうですか。

○ 土井数馬委員外議員

政策サイクルで2年間でまとめていこうという大筋が決まってきておるのであれば、副委員長や中森委員が言ったようなことで、全然委員はもう2年でいいと思うんですよ。委員長、副委員長はさっきもありましたけれども、委員会の互選によるものとしますので、2年もしたない人もおるやないですか。2年もしたないよと、そういうのは自由で、今回

かわってくれとか、いや、もう一年させてくれと、皆さんの意見を聞いて、それで決めていけばいいことやないかなと思います。

あと、次の2年目のときの、これまた役員選考委員会に戻りますよね、入れかえるんですから。だから、その辺の細かいこともいろいろあると思うので、その辺はもう大枠だけ、何遍も言いますが、その辺はいっぱい考えていかないかんこともあると思いますので、委員は2年、正副委員長は互選ですので、2年やっても、嫌な人はもうやめてもらってもええし、そういうふうな考えです。意見ですけど。

○ 豊田政典委員長

付随する細かい部分は、中森委員も言っていただいたように、課題としてこの特別委員会で出しておいて、あと細かいことは決めてくれと、しかるべきところで。そういう扱いでいいと思うんですけど。

じゃ、一通り、きょうの時点での意見を聞きましたので、この空気感も、またできる限り皆さんの考え方も政友クラブさんにも伝えていただいて、議論していただいて、次回、8月10日になりますが、まだ任期についてを深掘りしていきたいなと思うし、政策サイクルのほうも修正していきたいと思って、何とか8月、あと2回ありますので、この特別委員会としてはね、この特別委員会としての意見集約ができると大変ありがたいなというところがございますので、お願いいたします。

きょうのところは、議論についてはここまででよろしいでしょうか。

(なし)

○ 豊田政典委員長

最後、その他というか、今後の日程ですけれども、次回は8月10日金曜日、その次が8月22日水曜日、いずれも13時30分からですので、よろしく願いをいたします。

それでは、本日の特別委員会はここで閉じたいと思います。ありがとうございました。

15：56 閉議